

プライドの高い寿司職人が、仕事に優劣はないことを理解し、今やれることに力を注ぐようになる。

俺のスマイル包丁

登場人物

松山（57）：ベテラン寿司職人。

雅（24）：回転寿司屋「海っ子寿司」の
店長。

梅元（47）：松山や雅が働いている会社の
社長。

バイトたち
パートたち

司会者
選手権参加者の職人たち

○料亭・厨房

高級な料亭の厨房。
松山（57）が魚をさばいている。
それを眺めている梅元（47）。
松山、魚をさばきながら話す。
松山「それで：梅さん、話というのは？」
梅元「：その、言いにくいんだが」
松山、手を止めて梅元を見る。
梅元「君には異動を頼みたいんだ」
松山「どこにです？」
梅元「海っ子だ。そこで料理長として売上
アップの為に働いてほしい」
松山「この俺に回転寿司屋なんかで働けっ
ていうんですかい！」
松山、声を荒げる。
梅元「君の腕を見込んでのことだ。頼む」
松山「：いつここに戻れるんで？」
梅元「海っ子の売上次第だ。期待している」
松山「：わかりましたよ」

○回転寿司「海っ子」・朝

バイトとパート達がレジ前で朝礼をし
ている。松山も並んでいる。
松山「とういわけで今日からこちらでお世
話になる松山です。よろしく願います」
全員松山に拍手。よろしく願います
すという声上がる。そこへ雅（24）
が制服に袖を通しつつ走ってくる。
雅「ごめーん！飛ばしてきたけどやっぱ
間に合わなかった！（松山に気づき）あ、
私が店長の雅。宜しく松山さん」
松山、雅を見て少し呆気にとられる。
松山「（「こんな若い娘が：大丈夫か（こ）」

× × ×

店にお客が入り、営業中の店内。
ピークの真っ最中。

雅 「ちょっと松山さん！5番さんにまだマグロ行っていないよ！」
すいません！と返事しながら寿司を握る松山。

× × ×

雅 「20番さんにイカとエビ大至急！」
慌てて握る松山。

× × ×

雅 司握 「大トロ3皿まだ出てないの？何年寿司握ってるのよ！松山！」
松山 「30年です！」
雅 「ならもっと早くしてよ！」
イライラしつつ握る松山。

○海っ子、厨房、夜

雅 「はー、今日は久しぶりに忙しかったなあ。ところで松山さん、ちよつと握りが丁寧すぎるよ。もうちよい早くしてくれないかな」
松山 「生憎ですがね、店長の握りじゃあんなの寿司とは呼べません。早けりやいっつてもんじゃねえです」

雅 「松山さんみたいに綺麗でも、それで遅くてお客様が怒ったら意味ないでしょ」
松山 「(雅の指摘を無視して)それにその包丁もだ。何ですかそれ」
雅の包丁を見て松山。雅の手にはスマイルマークがついたピンク柄の包丁。

松山 「これは私のスマイル包丁」
雅 「は？」

雅 「このマークみたいにお客様を笑顔にするのよ。かわいでしょ？」
松山 「志はご立派ですがね、ならそれほどご立派な包丁使うんなら腕を上げてもらわねえと」
雅の手元を包丁で指す松山。まな板の上には切り損ねた魚が。

○海っ子、店長室、夜

時計が11時を刻んでいる。雅がパソコンで売り上げの入力をしている。その後ろで煙草をふかしている松山。

松山 「今日の売り上げは？」
雅 「んー、21万だった」

松山 「ココに来て1年ですけど、ほんっと売上少ないですねこの店。俺が前働いてた料亭は……」

雅 「(後ろを振り向きつつ)あのね、それを上げるために来たんでしょ」

松山 「だから言ってるでしょ？あんな安い冷凍パックのネタなんか使ってたら売上なんて上がるわけがねえって」

二人が口論し始める。と、そこへ電話。受話器を取る雅。

雅 「もしもしお電話ありがとうございます……あ、梅元社長？お疲れ様です。ハイ：ハイ……え？何を……」

雅の声のトーンが急に落ちる。それを見て松山何かあったなと察する。

雅 「ハイ：失礼します」
しばらく電話してから受話器を置く雅。しばし呆然としている。松山その様子を
見ると尋ねる。

松山 「どうかしたんで？」

雅 「ゆっくり松山を見上げつつ
「うちの店、たたむんだって……」

松山 「え？」
雅 「売上がる見込み無いし、別の店舗に力入れたいから……」

松山 「俺や店長は？」
雅 「松山さんは前いた料亭に戻すってさ」
松山 松山それを聞いて小さくガツポーズ。
「マジか！やっつと戻れる！」
それを見た雅、俯く。
松山 「あ：そ、そんで、店長は？」
雅 「私は：自宅かな」
松山 「：え？」
雅 「売上がらないし、責任取ってクビ
だつて」
松山 そういうと雅、椅子から立ち上がる。
雅 「ごめん松山さん、後の閉店作業お願
い。今日はもう帰るわ：」
松山 店長室を出ていく雅。松山その後姿を
眺めている。

○海っ子、店内

松山 朝の仕込み時間。厨房で松山が魚をお
ろしている。そこへ遅れて雅がやって
くる。
松山 「お早うございます店長」
雅 「：お早う」
松山 雅、ぼそりとつぶやき、仕込みを始め
る。周りのバイトも雅が元気ないので
気付く。
松山、それに気づきつつもわざとらし
く話を切り出す。
松山 「：店長、『全国No.1選手権』って観
てます？水曜にやってる番組の」
雅 「え？ああ：、たまに観てるよ。此間
の消防士選手権は面白かったな」
松山 「今度、回転寿司職人選手権やるらし
いですよ」
雅 「ふーん：」
松山 「で、ウチの会社がそれに出場するん
ですと。代表として海っ子から雅店長がね」
雅 「はい？」
松山 「だーかーらー、店長が代表としてテ
レビ番組に出場するんですよ」

雅 「：何言ってるの？」
 松山 「いやね、あの後、梅さんに電話して
 やったんすよ」
 松山 「今度の全国No.1選手権で、雅店長
 が優勝したら良い宣伝になって、売上が
 るんじゃないですか？」
 雅 「私が？全国選手権に？」
 松山 「何言ってるんすか。梅さんに店長が優
 勝できるって実力見せて、クビ取り下げて
 もらわなきゃあ。それに俺は回転寿司の大
 会なんかに出たくねえし。出ても優勝は
 決まってるますしね」
 松山 「で、梅さんもこの話したら結構乗り気
 でしてね。優勝したら昨日の件、考え直し
 てくれるって言ってましたよ」
 雅 「でも、松山さんはこの店潰れたら元
 いた料亭に帰れるんじゃないの？」
 松山 「そうですけどねえ、俺が来たのに売
 り上げも上がらず店たたむってなっちゃあ、
 逃げだしたみたいで情けねえ」
 雅 「：」
 松山 「選手権まであと四か月しかありませ
 んがね。俺が鍛えてやりますよ。本物の寿
 司の握り方ってやつをね」
 雅 「そう、そうだね。やるだけやってみ
 よう」
 松山 「その代り泣き言はナシですぜ」
 雅 「わかってる」
 雅、松山に頭を下げる。

×
 ×
 ×

営業が終わった店内で、練習する二人。
 松山に怒鳴られながら特訓する雅。

○海っ子店内、朝

レジ前で松山とバイトたちが朝礼をし
ている。

雅の姿は見えない。

バイト 「店長また寝坊ですかねえ……」

松山 「まったく、緊張感がないのかね。あ
の人は……。仕方ない、各自仕込みして
くれ」

松山 「ここで店の電話が鳴り響く。松山やれ
やれといった感じで受話器を取る。

「はいもしもし海っ子です……。え？ 警
察の方ですか？ ハイ……。ハイ……。え？ ト
ラックと？」

○葬式会場内

喪服を着た松山、会場に入る。

雅の遺影に一礼し、線香を添える松山。
泣いている遺族に一礼し、外に出る。

○同、駐車場

会場を出て車に向かう松山。

そこに紙袋を持った梅元がやってくる。

梅元 「……ご苦労、松山君」

松山 「……いえ、梅さんも」

梅元 「まさか、こんなことになるとはな」

松山 「……」

梅元 「彼女の助手席に、これがあつたそう
だ」

梅元、松山に紙袋を渡す。

梅元 「遺族の方に渡したんだが……。店で誰
かに使ってほしいと言われたよ」

松山、黙って紙袋を受け取る。

梅元 「休日もち帰って練習してたそうだ。

おかげで休みに毎日刺身が食べられると親
父さんが苦笑してたよ」

梅元、ため息をつく。

梅元 「海っ子の件だが、残念だがたたむこ
とにするよ。君の異動についてもまた連絡
するから」

梅元、そう言うとその場を後にする。
それを見送ると、松山車に乗り、会場
を去る。

○松山の部屋、夜

散らかった狭い畳の部屋で、松山が煙
草をふかしている。テーブル上に梅元
から受け取った紙袋。
松山、煙草片手に開ける。中から30
センチ程の長方形の箱が出てくる。
その中には何枚かのメモと、スマイル
包丁が入っている。
メモには雅が松山から教わった魚の
さばき方や、寿司の握り方がびっしり
と書いてある。
その中の一枚に、「お客様の為、松山師
匠の技で絶対優勝してやる！」と書か
れているのを見つける。
松山、煙草を灰皿にぐりぐりと押しつ
け火を消すと、少し考えた後ケータイ
で電話をかけ始める。
松山 「もしもし、梅さんかい？夜遅くにす
いません。ちよつと今いいですか？ええ：え
え：、実は頼みごとがありましたね：」

○スタジオ内、選手権会場

スタッフと出場者が会場で準備をして
いる。その中に松山がいる。
司会 「さて、皆様お待ちせしました！これ
より『全国No.1選手権』回転寿司職人No.1
を決める激しい戦いが！今！始まります！
ワ！ッと観客席から歓声が上がります。
司会 「ではまず職人の皆様には、手早く2
0人前の寿司を握ってもらいます！今回の
お題目はヒラメ！さて、準備はいいですか
アッ！？」
選手権の参加者たち、自前の包丁を手
に取る。

松山も包丁を取り出す。しかし自分のものではなくスマイル包丁。司会者やほかの職人は、松山がピンクの柄の包丁を取り出したことに気づき、驚く。カメラが松山の手元をアツプ。会場のスクリーンに映し出され、観客からどよめきや笑い声が聞こえる。が、動じない松山。

司会者「おおくと、松山選手、なかなか個性的な包丁を使用する模様！果たしてその腕前は！？」

笛が鳴り、各自一斉にヒラメをさばき始める。

松山、スマイル包丁でとんでもない速さでネタを切り、あつという間に寿司を握っていく。

司会者「ああつと！これはーっ！松山選手とんでもなく早い！早い！ものすごいスピードでヒラメをおろしていくうー！」

松山人数分の皿に寿司を握ると、審査員に寿司を食べてもらう。

審査員たち、称賛する。
スコアボードの松山のポイントが増える。

松山、自分の寿司を食べた審査員たちの笑顔をじつと見つめている。

司会者「松山選手、圧倒的な速さと技で第一回戦突破！」

松山の握りを見て一気に盛り上がる会場内。選手権はその後も続き、松山が優勝する。

会場の観客席で、梅元がその様子を見ている。優勝カップを受け取る松山に拍手を送る梅元。

○海っ子、厨房、朝

松山がスマイル包丁で魚を切っている。そこに梅元がドアを開けて入ってくる。
松山「あ、梅さん。お疲れ様です」

梅元 「お疲れ。いやあ、松山君。優勝おめで
とう。流石といたところか」

松山 「恐れ入ります」

梅元 「しかし、まさか君が雅君の代わりに、
回転寿司の大会に出るなんて言い出すとは
な。予想もなかったよ」

松山 「時間かかっちゃいましたけどね。梅
さんの当初の目論見通り、あの通りですよ」

松山 「顔を上げて厨房から店の入り口
を見る。まだ開店前にも拘らず、店の
前には行列ができています。」

梅元 「テレビの様だな。しかし、ほんと
にいいのか？元の料亭に戻らなくて」

松山 「はい、もう一回、すっかりここで
梅元 握ろうと思っただけです」

梅元 「：そうか。まあ、それなら海っ子を
よろしく頼むよ、松山君」

松山 「わかりました」

梅元 「笑うとほかのスタッフに挨拶し
つつ厨房から出ていく。」

松山 「その姿を見送り、また魚を切り
始める。」

終